

# 「真実の宗教」 (二十)

—— 私にとって報恩とは ——

櫟 暁 講 述

## 〈開式挨拶 三輪民子護持会副会長〉

あいにくのお天気の中、皆様にお集まりいただき、本当に有り難うございます。

今日は、親鸞聖人のご恩徳に報謝し、いのちの道理を深く訊ねる、一年のうちで最も大切な仏事であり、真宗門徒として必ず勤める法要、報恩講をご一緒に勤めさせていただきますことを、心よりお喜び申し上げます。

本日は本当に有り難うございます。

## 〈住職挨拶〉

皆様、光照寺第二十二回の報恩講、この雨の中、ようこそご参集下さいまして、有り難うございます。私も報恩講というと、最初から緊張しております、いまだ二十二回でも慣れないという状態であります。常に、「初心、忘るべからず」ということは、世間にも仏法にもあるわけですが、報恩講教団と云われる中に、重い報恩講と云われる中に、初心忘れると云つても忘れられないのですが、やはり、報恩講というと、どうしても重く、力が入るなあと思わせていただくことになりました。

二十二回目の報恩講を迎えるに当たり、皆様もご覧になったと思うのですが、縁ありまして、南側の土地が光照寺の境内地として、聖地としてご縁をいただきました。願わくばと、ずっと願ってきておるひとつは、このように住宅をお寺にしてきたこの現状でありまして、できれば本堂を建てたいと長年の念願であるわけです。簡単にはなかなかできないわけでありませう。私も七十でございます、私の生きていくうちはどうかなあ、こう思わざるを得ない中で、まず本堂用地として確保できたのではなからうかと、ご縁をいただくことができたのであります。これは一歩大きく具体的な形として進むことが出来たと。後は副住職に、また次の代にでも念願がかなうような縁が集合すれば、本堂はかなうのではなからうかと。私の代では願いが

らも、まあ用地だけのご縁をいただきまして確保できた、地続きでできたということは本当にあり得べきことだと思っております。

本堂が建つまでの間、坊守の意見でございまして、親鸞聖人の銅像を建てて、親鸞聖人に立っていたらどうかかなあと。それはいいなあと。親鸞聖人の銅像を本堂が建つまで立っていたらどうか。本堂が建つということがかかれました時には、親鸞聖人はいらなくなるわけではありません。然るべき処にお移しして、また親鸞聖人の教えを末代にお導きをいただきたいとういうことで、坊守が本堂のできるまでの間、親鸞聖人の銅像を建てたらどうかという意見をいただきましたまして、このような形で報恩講に間に合って、皆様に親鸞聖人の銅像を見ていただくことがかかれました。雨でなければ見ていただくかなと思いましたが、また機会がありましたらそのほうがいいと思います。八尺です。一尺は三〇cm位ですから、二m四〇cmの高さ、台座から銅像、御影石の台がありますから、全体で三m八十八cm、四m弱ということ。東の道路から見ますと、段々と高くなりますから、坂道になっていまして、もっと高く見上げるような形で、親鸞聖人が立ってくださって、外から十分に拝することができますので、今日は雨ですし、また時間もあまりありませんので、また機会があれば、ぜひお参りしていただきたいと思えます。

報恩講に親鸞聖人の銅像を建立することができて、除幕式も十月十日に行いました。二十二回の報恩講の中に、このような本堂用地として用意し、除幕式をもって、親鸞聖人の銅像を建立す

ることができたということ、私もこれでいつ死んでもいいのではないかと。後は願っただけ託して死んでいけるのではないかとこう思つて、後は教えだけをすっかり人に、教えは伝わるわけですから、人に教えを、一人でも信心の人を生み出すことはできませんが、それこそ櫟先生とか大勢の善知識のお力、また先達、そういう先人のご苦勞の中に必ず教えは伝わるものだ、末代に伝わるものだ、いや、伝えていかなくてはならないと、なにかそのような思いが私に強く身を動かすようなものがあるわけでございます。そこは阿弥陀様の本願に乗託し、非常に困難な時代状況の中に、未来際に八万四千の煩惱の悩み苦しみ、天災人災もあるでしょうし、生老病死という四苦八苦を超えていくものは、本当にただ念仏というこの教えの中にすべてのものが救われるという確信は、私は変わりません。これを受け継いで末代に伝えていきたいというのが、私をして歩ませる原動力でございます。本当に念仏まこと、仏法まこと、というたった一点のですね、歩みをさせていただきたい。そして次に託していききたいと、こう思っております。

親鸞聖人の銅像の裏側に、「仏法弘まれかし 念仏よ興れ」という言葉が銘板で張られております。文字は、坊守の字であります。言葉は、私ということにさせてただきまして、親鸞聖人のお言葉に、「世のなか安穩なれ 仏法弘まれ」という言葉があるわけですが、「仏法弘まれかし 念仏よ興れ」と、それを受けての言葉の表現でございます。仏法弘まれの弘は、弘願と同じで、本願と同じで、弓偏にカタカナのムを書いて弘まると、「仏法弘まれかし」。それと、「念仏

よ興れ」、興隆というのと、興すというのと、その弘はコウ、グとも読むわけですが、弘と興の二字をその言葉からいただきまして、本山に山号をお届けしまして、いただきました。その門柱に、山号を弘興山、光照寺。山号と寺号を門柱に並べて銘板で表示してみました。弘興山「仏法弘まれかし 念仏よ興れ」これは願いであるところ願って、山号といたしました。光照寺というのは、各宗派ありますし、浄土真宗寺院もたくさんあるのです。東京教区も多いです。なかなかいいようです。私のいただいた法名が寺号になっっているわけです。やっぱり一番、「念仏衆生撰取不捨」というその言葉から、「光明遍照十方世界 念仏衆生撰取不捨」、この光照というのが、一番表現し易いいただき方かと思えます。その寺号と、「仏法弘まれかし 念仏よ興れ」弘興山という山号、この二つが光照寺の願いとして、末代に伝わってほしいという名告りだと思えます。

阿弥陀様が名告られておられますので、光照寺も山号と寺号で、弘興山、光照寺と、こう名告った中に、「仏法弘まれかし 念仏よ興れ」、これをずっと伝えていきたいという願いをたてていただきまして、親鸞聖人の台座の裏に、銘板が張られておりますので、ご覧になる時には、裏に回ってひとつ見ていただければと思います。長くなりましたが、ご挨拶としてはそういうことで。

これから櫟先生のご紹介をいたします。毎回するわけですから、それからおあげする本の中にも書いてありますので、時間も押し迫っておりますので、端的に申し上げたいと思います。櫟先

生もたしか八十九歳になられるわけでございます、そこにいる川上さんが九十になられてというわけですね。私の親寺さんの照誠寺の前住職さんが、川上さん、櫟先生、照誠寺の前住職さんと、一年月位のずれのようでございます。川上さんが一番お姉さん、九十歳になってしまったと。次に櫟先生、次、照誠寺の前住職ということですが、なかなか九十を過ぎ、なお九十になんなんとしてもお元気であることは本当に頼もしいありがたいことだと思います。親鸞聖人も九十歳まで生きられ、我々も別に長生きしたらいいというわけではありませんが、念仏し、本当に櫟先生のお姿を見ても、鹿兒島から毎月、親鸞聖人のみ教えに聞くといいお話の為に、関東の地まで、埼玉の地まで来ていただいております。そして、この報恩講は毎年こうしてお勤めしてください。当たり前ではないのです。櫟先生も、生老病死を抱えた中の身をおして、ここに伝えねばやまじとこうやって来てお説き下さいますので、また来年聞けるさとか、いつも同じということはない。初めてあるがごとく今聞くといい中に、報恩講の櫟先生が云われる願恩とか教恩ということの中に恩を感じて私の為に説きおかれたる教えだったと、親鸞聖人の御苦勞を思い、阿弥陀様の大きな大慈悲心をいただいて、たすかりようもないこの私がたすけられる、そういう世界を今ここに感じていただく。そこを感じていただければ、非常に有意義な、また、意義のある知恩報徳の報恩講になるだろうし、先程、蓮如上人は報恩謝徳と、櫟先生は教恩・願恩とか、今日皆さんに差し上げた冊子には、知恩報徳と、副住職が読んだ『御俗姓』の中には報恩謝徳という、三

つの言葉が一体となつて本当に報恩のまことがつくせないという深い懺悔の中に、共にたずかる世界がここに説かれているところ感じていただければ、私はそれこそ真の報恩であると、かように思っております。

短かったです、櫛先生のご紹介をこの程度で終わらせて、櫛先生のご法話をいただきました。先生、宜しくお願い致します。

もつと話したかったです、お許し下さい。南無阿弥陀仏。



## 〈資料一〉

### 御俗姓口語訳

― 報恩講をおつとめする意義 ―

宗祖親鸞聖人の御先祖は藤原氏であり、聖人は後長岡の大臣と云われた内麿公の末、日野有範の子であります。

また聖人は、我々末代の凡夫に対し本願念仏を教えるため此の世に現れた阿弥陀如来の化身とか、中国の浄土教の祖である曇鸞大師の生まれ変わりとか云われています。

このような（世に稀な素晴らしい）方でありますので早くも九才の時、慈円僧正（慈鎮和尚）の弟子として得度式を受けて「範宴」という法名を付与され、天台宗の僧侶となりました。それから比叡山の横川の源信僧都の教えの伝統の中で修行し、天台の学問を極められました。

ところが二十九才のとき、元祖法然上人の本願念仏の教えに会い、上人の優れた弟子となって真の大乗仏教としての浄土真宗を身にいただかれ、念仏一つで宗教的自覚者となる道を明らかに示されました。そして私達のような家庭生活・職業生活の中で苦悩している愚かな者に、真実の如来の光明の世界（真実報土）に生まれるようすすめられました。

云うまでもなくこの十一月二十八日は、親鸞聖人の御命日であり、昔から真宗念仏者は皆忘れずに毎年御正忌報恩講をおつとめし続けて来ております。

だから当流本願寺教団に真宗門徒として加入し、他力の信心をえようとしていながら、聖人の御恩を報謝しようとする志のない者は、まったく枯れ木や岩石のようなもので、聖人と心の響き合いのない名ばかりの門徒であります。

聖人の御恩はなにもものにも比較できない極めて高く深く大きなおめぐみであり、この大恩を報謝する心を失ってしまつては、真宗門徒として目覚めて生きる意味が有りません。

このような深いわけがあつて、毎年の旧例として七日間、特別の莊嚴を整えて儀式を行い、報謝の為に最高のお勤めをいたします。この七日間の報恩講には、全国各地から必ず門徒が参集してこの御仏事を厳肅におつとめするならわしが今日までずっと続いていきます。

しかし、安心あんじんがまだはつきりしていない者には、御恩報謝の心が徹底する道理が有りません。

未安心みあんじんの者は、この報恩講七日間に、

仏法の信心とはどういう信心なのか、

他力の信心とは、自己自身にとってどういう目覚めなのか、

本願念仏のはたらきでどのように自己自身が変革されるのか、

自分は果たして信心がえられているのか、

などをよく尋ね、よく聴聞して、法による目覚めが確實になることが何より大事であります。そして眞実信心が間違ひなく定まったとき、はじめて宗祖親鸞聖人の御恩に報いることが出来るのであります。

悲しいことですが、私達は聖人がおなくなりになってから百年以上もあとに生まれたので、直接聖人にお目にかかつてみ教えを聞くことはできません。しかし残されたお言葉によつて私達が見えかけてゆく道理としての教・行・信・証の意義を我が身の上にはつきりいただくことが出来ることは極めて尊く有り難いことであります。

しかしこのことを今日の宗門全体の問題として考えたとき、聖人が「教行信証」を著作して私達に示された浄土眞宗と云う教えを実践しようと志す多くの人々の中で、眞実信心をえた人は極めて数少ないのであります。

いたずらに他人の批判を気にしながら、義理や名誉の為に報恩講に参詣して、いかにも報恩謝徳の意味を知っているかのようにふるまっていますが、念仏申すひとおも一念の中に、本願に相応した究極の目覚め（一念帰命の眞実の信心）を体得し得ない人々は、どんなに懇志をはこんでも、この報恩講をおつとめする本当の意味にかなう筈はありません。それはせつかく風呂にはいつても、垢をおとさないで出て来るようなものです。

このようなわけで、この度の七日間の報恩講中に本願他力の意義を十分聞き開いて、ただ念仏

一つで真の目覚めが得られるという道理に身を挙げて納得出来たときに、初めてこの聖人の御正忌の本来の意義にかなうこととなります。

この本来の、報恩の意義にかなう御正忌がつとめられたとき、御正忌が単なる聖人の御命日の法事にとどまらないで、本当の意味の報恩謝徳の御仏事となるのであります。

あなかしこ あなかしこ

(この口語訳は櫛暁が作成したもので、国語学的完訳ではありません)

## 〈資料二〉

### 報恩講法話資料

#### 『教行信証』の完成

宗祖親鸞の名著『教行信証』は、如来の大悲の深遠なることを念じ、釈尊をはじめインド・中国・日本の高僧方の経・論・釈等の要文を集め、体系的に浄土真宗の教相を顕した根本聖典である。

宗祖親鸞は『教行信証』をたえず加筆訂正し、それがほぼ完成するのは、帰京の後の寛元五年（一二四七）〈聖典年表一一三七頁上段―一二三〉ごろであると考えられる。というのは、同年に門弟の尊連そんれんに『教行信証』を書き写すことを許可している。また建長七年（一二五五）には専信せんしんも書写しており、これは『教行信証』訂正の作業が一段落し、門弟に書写させてもよい状態になったものと考えられる。

『教行信証』の著述の過程において、第六卷「化身土卷」に、正像末しょうまつの三時の年代を考える文中に「わが元仁元年」（三六〇―一二三）とあつて、宗祖親鸞五二歳の元仁元年（一二二四）を基準に計算している。したがって、少なくともこの化身土卷の正像末の三時について述べた

ところは、元仁元年に書かれたことはたしかである。

現存の最古の『教行信証』である自筆の坂東本『教行信証』（東本願寺所蔵）は、最初の原稿（初稿本）ではなく、初稿本を書写加筆したものであるともいわれている。もともと初稿本には元仁元年の表示はなく、改訂した部分にあるとして、『教行信証』の一応の成立を元仁元年以前に求める説もある。元仁元年といっても、初稿本『教行信証』に引用されている『般舟讚』（善導著書）が、建保五年（一二二七）にはじめて仁和寺で発見されたといわれるから、それ以前にはさかのぼらないとみられる。

元仁元年は、法然上人の十三回忌にあたる。また同年には比叡山の衆徒が念仏禁止を朝廷に要求し、それによって嘉禄・文暦の念仏弾圧がひきおこされている。

宗祖親鸞には、専修念仏者に対する度重なる不当な弾圧に対し、仏教における専修念仏の正しい位置づけを論定しようとする意図があり、それが『教行信証』中に表れていると思われる。

### 教行信証の概要

浄土真宗とは『大無量寿経』に説かれた阿弥陀仏の本願を信じて念仏もうし、浄土に生まれて生死の迷いを超えぬく仏教である。

宗祖親鸞（一一七三～一二六二）は、その主著『顕浄土真実教行証文類』（『教行信証』）に

において、『大無量寿経』によつて、自身の深い宗教体験にもとづく教相を体系的に述べ、その教巻の冒頭に、

「謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり」（二五二―L三）とある。

それは、浄土真宗とは、往相・還相おうそう げんそうという二種の回向えこうを軸として展開し、教・行・信・証の四法として開顕される教法であると明示している最初の統括的要語である。

ところで宗祖親鸞は、自身が聞信している浄土真宗は、恩師・法然（一一三三―一二一二）によつて開かれたといっている。

『高僧和讃』（四九八―B二）には、

「智慧光のちからより 本師源空あらわれて 浄土真宗をひらきつつ 選択本願のべたまう」と述べ、また『教行信証』後序に「真宗興隆の大祖源空法師」（三九八―L十三）とあるように、浄土真宗を開宗したのは、法然であるというのが、宗祖親鸞の一貫した考えであつた。

しかし、「浄土真宗」という言葉は、現存する法然の著書や語録のなかにはないから、おそらくは宗祖親鸞が名づけたものであるかと思われる。にもかかわらず浄土真宗は、法然が立教開宗したという意味は、法然の「浄土宗の真実義」（参照『御消息集』広本（五）五六六―L四「浄土宗のまことのそこ」という意味であろう。

『大無量寿経』の宗教

『教行証文類』の「総序」<sup>そうじよ</sup>が終わって「教巻」がはじまる直前に（一五〇―一七十三―一五二）、  
「顕真实教一、顕真实行二、顕真实信三、顕真实証四、顕真仏土五、顕化身土六」と、この書  
にあらわされる項目が列挙（標列）されているが、そのはじめに「大無量寿経 真実の教、浄  
土真宗」（一五〇―一七十一）と記されている。これは『教行信証』六巻は、「真実の教」であ  
る『大無量寿経』の意義内容であり、そこに説かれている本願とその救済の意義が「浄土真宗」  
であることを表している。

ところで『大無量寿経』とは「如来の本願を説きて経の宗致」<sup>しゅうち</sup>（根本趣旨）とす、すなわち  
仏の名号をもって経の体（體）（本質）とするなり」（「教巻」一五二―一七九）といわれている  
ように、『大無量寿経』は万人を平等に救おうと願いたたれた阿弥陀仏の本願とその成就とし  
て、南無阿弥陀仏の意義を説きあかした経である。それゆえ『大無量寿経』真実教の意義が浄  
土真宗であるということは、この経の核心（宗致＝根本趣旨）である本願（根本は第十七、十  
八願）が浄土真宗の本旨であるということである。この意味で『末燈鈔』には「選択本願は浄  
土真宗なり」（六〇―一―一七）とある。

選択本願<sup>せんじやくほんがん</sup>に誓われている救いの究極的内容は「本願を信じ、念仏を申さば仏になる」（『歎  
異抄』十二（六三一―一七九））という念仏成仏の一道である。これを「大経和讃」には「念仏



成仏これ真宗（四八五―A二一）と讚嘆さんたんしている。

宗祖親鸞は、『大無量寿経』真実教によって、南無阿弥陀仏が唯一の真実行であると深く信じて、往生・成仏する教えが浄土真宗であるという教えのすじみちを建てて、その内容を往相・還相の二回向と教・行・信・証の四法として展開明示したのである。

立教開宗りつきょうかいしゅうとは、仏祖の教えに信順して、独自の教義を樹て（立教）、新しく一宗を開く（開宗）ことである。この大事をなしとげた人を門弟が宗祖とたたえるのである。立教開宗するには、①宗の名称を定め（宗名）、②その教えが依って立つ根拠となる経典を選定し（所依しよえの経）、③その教えが仏教全体のなかで、どういう位置を占めるかを明らかにするために教判きょうはんを行い（経判）、④さらにその教えが、釈尊以来、どういう祖師によって伝えられてきたかという伝承（師資相承ししそじょうじょう）を明示しなければならない。

法然は、『選択集』の第一章（二門章）において、これらの四項目について独自の見解を示した。すなわち宗名を浄土宗とし、所依の経典としては『大無量寿経』、『観無量寿経』、『阿弥陀教』の浄土三部経を指定し、教判としては聖浄二門判しやうじやうにもんはんを立てて仏教を聖道門しやうどうもんと浄土門じやうどもんとの二種に分類し、聖道門とはまったく別の法門をもっている独自の仏教としての浄土宗を位置づけた。そしてその教法の伝統として、一往は曇鸞、道綽、善導、懷感、少康の五祖相承を立て、再往は善導一師によると断言した。こうして浄土宗の立教開宗、すなわち浄土宗の独立

宣言を行ったのである。

### 親鸞聖人の立教開宗

宗祖親鸞の『教行信証』には、立教開宗宣言の意図を表す文を見ることができない。しかし随所に、上にあげたような四項目についての独自の見解が示されている。すなわち宗名としては浄土真宗といい、所依の経としては一往は浄土三部経に依るが、再往は『観経』、『小経』を方便教とし、『大無量寿経』だけを真実教と判定している。また教判としては聖浄二門判をさらに詳細にした二双四重の教判（『愚秃鈔』へ上）四二三一―六）を立て、浄土真宗を究極の仏教と位置づけ誓願一仏乘（一九七―二二）であると宣言した。相承については、龍樹（一五〇―二五〇頃）にはじまり、天親（四〇〇―四八〇頃）、曇鸞（四七六―五四二）、道綽（五六二―六四五）、善導（六一三―六八一）、源信（九四二―一〇一七）、法然（一一三三―一二一一）の七高僧の伝統系譜を明らかにした。

このように法然の教えと、宗祖親鸞の教えとを対照したとき、たしかにその教説の本質的な「念仏往生」の一点では完全に一致するが、その教相や体系の立て方には大きな変容がある。たしかに宗祖親鸞には立教開宗の意図はなかったが、『教行信証』撰述の結果として、「浄土真宗」という独自の仏教を開く偉業を成し遂げたといわねばならぬ。後世、その教えの流れを

汲む門弟が親鸞を宗祖と仰ぐ所以はここにある。

### 本願力回向の宗教

宗祖親鸞は、浄土真宗とは、本願力回向えここうの二相である往相わうそう（浄土へ生まれていくありさま）・還相げんそう（穢国えこくに還り来るありさま）と、その往相として回向せられた教・行・信・証という四法を基本として成立している教法であると明示した。（「教巻」一五二―一七三）

『教行信証』は、その往相の四法を中心として、また還相を証に摂めて釈している。

その『教行信証』の広博な釈を要約した『浄土文類聚鈔もんるいじゆしやう』（略本）によれば、「しかるに本願力の回向に二種の相あり。一つには往相、二つには還相なり。往相について大行あり、また浄信じやうしんあり」（四〇三―一七）とある。

『教行信証』では、浄土真宗に二種の回向があるといい、ここでは本願力回向に二種の相があるといわれるのであるから、浄土真宗と本願力回向とは、その内容は同じである。浄土真宗とは、本願力回向を軸として展開する往生浄土の教法であることがわかる。法然の浄土宗は、選択本願の一語に要約できるが、宗祖親鸞の浄土真宗は本願力回向の一句に摂まる。『教行信証』は法然の選択本願の意義内容を、本願力回向という道理で詳細に顕わしたものであるといえる。ここに宗祖親鸞が浄土真宗を立教開宗した意図を明確に知ることができる。

## 〈資料三〉

報恩・恩徳（聖典抄出）

教行信証（信）二四六―七一

第二に、もろもろの菩薩ありて、自ら云わく、「我曠劫より已来、世尊我等が法身・智身・大慈悲身を長養することを蒙ることを得たりき。禅定・智慧・無量の行願、仏に由つて成ずることを得たり。★報恩のためのゆえに、常に仏に近ずかんことを願ず。また大臣の、王の恩寵を蒙りて、常にその王を念うがごとし。」

親鸞聖人御消息集（広本）五六九―七二

往生を不定におぼしめさんひとは、まずわが身の往生をおぼしめして、御念仏そうろうべし。わが身の往生、一定とおぼしめさんひとは、仏の御恩をおぼしめさんに、御★報恩のために、御念仏、ここにいれてもうして、世のなか安穩なれ、仏法ひろまれと、おぼしめすべしとぞおぼえそうろう。よくよく御案そうろうべし。

仏説無量寿経卷下 六三―七一三

今我、衆等、度脱を得ること蒙る所以は、みな仏の前世に道を求めしの時、謙苦せしが致すと

ころなり。★恩徳普く覆いて福祿魏魏として光明徹照す。空に達せること極まりなし。泥洹に開入して典攬に教授し威制消化す。十方に感動すること無窮無極なり。仏は法王として、尊きこと衆聖に超えたまえり。普く一切天人の師と為りて、心の所願に随いて、みな道を得せしめたまう。今仏に値うことを得て、また無量寿仏の声を聞きて歓喜せざるものなし。(註●謙苦  
●謙讓勤苦。身をへり下りつとめること。●福祿魏魏たり●仏果の福徳が高くすぐれている。)

教行信証(総序) 一五〇―一五二

ここに愚禿釈の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈、遇いがたくして今遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して、特に如来の★恩徳の深きことを知りぬ。ここをもつて、聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなりと。

教行信証(行) 一八八―一九

また云わく、『心地観経』の六種の功徳に依るべし。一つには無上大功徳田、二つには無上大★恩徳、三つのは無足二足および多足衆生の中の尊なり。四つには、極めて値遇しがたきこと、優曇華のごとし。五つには、独り三千大千世界に出でたまう。六つには、世・出世間の功徳円満せり。義、つぶさにかくのごとき等の六種の功徳に依る。常によく一切衆生を利益したまう、と。已上

教行信証（真仏土）三二四―L三

すでももつて真仮みなこれ大悲の願海に酬報せり。かるがゆえに知りぬ、報仏土なりというこ  
とを。良に仮の仏土の業因千差なれば、土もまた千差なるべし。これを「方便化身・化土」と  
名づく。真仮を知らざるに由つて、如来広大の★恩徳を迷失す。これに因つて、いま真仏・真  
土を顕す。これすなわち真宗の正意なり。経家・論家の正説、浄土宗師の解義、仰いで敬信す  
べし、特に奉持すべきなり。知るべしとなり。

浄土和讃 四八五―B一

★恩徳広大釈迦如来 韋提夫人に勅してぞ 光台現国のそのなかに 安楽世界をえらばしむ

正像末和讃 五〇四―C四八

無始流転の苦をすてて 無上涅槃を期すること 如来二種の回向の ★恩徳まことに謝しがた  
し

正像末和讃 五〇四―C五〇

南無阿弥陀仏の回向の ★恩徳広大不思議にて 往相回向の利益には 還相回向に回入せり

正像末和讃 五〇五―B五八

如来大悲の★恩徳は 身を粉にしても報ずべし 師主知識の★恩徳も ほねをくだきても謝す  
べし

正像末和讃 五〇八―B八

和国の教主聖徳皇 広大★恩徳謝しがたし 一心に帰命したてまつり 奉讃不退ならしめよ  
尊号銘文 五三〇―L八

「情思教授★恩徳実等弥陀悲願者」というは、師主のおしえをおもうに、弥陀の悲願にひとしとなり。大師聖人の御おしえの恩おもくふかきことをおもいしるべしとなり。「粉骨可報之擢身可謝之」というは、大師聖人の御おしえの★恩徳のおもきことをしりて、ほねをこにしても報ずべしとなり。身をくだきても★恩徳をむくうべしとなり。よくよくこの和尚のこのおしえを御覧じしるべしと。

浄土真要鈔本 六九九―L三

しかるにわれらさいわいにそのながれをくみて、もつばらかのおしえをまもる、宿因のもよおすところ、よろこぶべし、とうとむべし。まことに恒沙の身命をすても、かの★恩徳を報ずべきものなり。釈尊・善導この法をときあらわしたまうとも、源空・親鸞出世したまわずは、われらいかでか浄土をねがわん。たとひまた源空・親鸞世にいでたまうとも、次第相承の善知識ましまさずは、真実の信心をつたえがたし。

浄土真要鈔末 七〇八―L四

かの『文類』の第二にいわく、「憶念弥陀仏本願 自然即時入必定 唯能常称如来号 応報大

悲弘誓恩」（正信偈）といえり。こころは、「弥陀仏の本願を憶念すれば、自然に、すなわちのとき、必定に在る、ただよくつねに如来のみなを称して、大悲弘誓の恩を報ずべし」となり。「すなわちのとき」といふは、信心をうるときをさすなり。「必定の在る」といふは、正定聚に住し、不退にかなうというこころなり。この凡夫の身ながら、かかるめでたき益をうることは、しかしながら弥陀如来の大悲願力のゆえなれば、「つねにその名号をとなえてかの★恩徳を報ずべし」とすすめたまえり。またいわく、「十方群生海、この行信に帰命するものを撰取してすてず。かるがゆえに阿弥陀となづけたてまつる。これを他力という。

正信偈大意 七五三―七

「唯能常称如来号 応報大悲弘誓恩」\*といふは、真実の信心を獲得せん人は、行住座臥に名号をとなえて、大悲弘誓の★恩徳を報じたてまつれ、といえる心なり。

正信偈大意 七五八―一六

「弘経大士宗師等 拯済無辺極濁悪 道俗時衆共同心 唯可信斯高僧説」といふは、弘経大士といふは、天竺震旦我朝の菩薩祖師達のことなり。かの人師等、未来の極濁悪のわれらをあわれみすくいたまわんとて、出生したまえり。しかれば念仏の道俗等あまねくかの三国の高祖の説を信じたてまつるとなり。さればわれらが真実の報土の往生をおしえたまうこと、しかしながらこの祖師等の御恩にあらざらざらということなし。よくよくその★恩徳を報謝したてまつるべき



ものなり。

\*教行信証（行）二〇五―L一五

弥陀仏の本願を憶念すれば、自然に即の時、必定に入る。ただよく、常に如来の号を称して、  
★大悲弘誓の恩を報ずべし、といえり。

## 〈資料四〉

往生要集・源信（聖典抄出）

教行信証（行）一八八―一八五

『★往生要集』に云わく、『双卷経』（大経）の三輩の業、浅深ありといえども、しかるに通じてみな「一向専念無量寿仏」と云えり。三つに、四十八願の中に念仏門において、別して一つの願を発して云わく、「乃至十念若不生者不取正覚」と。四つに、『観経』には、「極重の悪人、他の方便なし。ただ弥陀を称して極樂に生まるることを得」と。已上

また云わく、『心地観経』の六種の功德に依るべし。一つには無上大功德田、二つには無上大恩徳、三つのは無足二足および多足衆生の中の尊なり。四つには、極めて値遇うしがたきこと、優曇華のごとし。五つには、独り三千大千世界に出でたまう。六つには、世・出世間の功德円満せり。義、つぶさにかくのごとき等の六種の功德に依る。常によく一切衆生を利益したまう、と。已上（下略）

教行信証（信）二二二―二一〇

『★往生要集』に云わく、『入法界品』に言わく、「たとえば人ありて不可壊の薬を得れば、一

切の怨敵その便りを得ざるがごとし。菩薩摩訶薩もまたかくのごとし。菩提心不可壞の法菓を得れば、一切の煩惱・諸魔・怨敵、壊ることあたわざるところなり。たとえば人ありて住水宝珠を得てその身に瓔珞とすれば、深き水中に入りて没溺せざるがごとし。菩提心の住水宝珠を得れば、生死海に入りて沈没せず。たとえば金剛は百千劫において水中に処して、爛壞しまた異変なきがごとし。菩提の心もまたかくのごとし。無量劫において生死の中・もろもろの煩惱業に処するに、断滅することあたわず、また損減なし」と。已上

また云わく、我またかの撰取の中にあれども、煩惱眼を障えて見たてまつるにあたわずといえども、大悲愍きことなくして常に我が身を照らしたまう、と。已上

教行信証（化身土・本）三三〇―七五

首楞嚴院の『★要集』に、感禪師（懷感）の『釈』（群疑論）を引きて云わく、「問う、『菩薩処胎経』の第二に説かく、「西方この閻浮提を去ること十二億那由他に憍慢界あり。乃至意を発せる衆生、阿弥陀仏国に生まれんと欲する者、みな深く憍慢国土に着して、前進んで阿弥陀仏国に生まることあたわず。億千万の衆、時に一人ありて、よく阿弥陀仏国に生ず」と云云。この経をもつて准難するに、生を得べしや。答う、『群疑論』に善導和尚の前の文を引きてこの難を釈して、また自ら助成して云わく、「この『経』の下の方の文に言わく、「何をもつてのゆえに、みな憍慢に由つて執心牢固ならず」と。ここに知りぬ、雑修の者は「執心不牢の人」

とす。かるがゆえに懈慢国に生ずるなり。もし雑修せずして専らこの業を行ぜば、これすなわち執心牢固にして、定めて極楽国に生まれん。乃至　また報の浄土に生ずる者は極めて少なし、化の浄土の中に生ずる者は少なからず。かるがゆえに『経』の別説、実に相違せざるなり」と。  
已上略抄

教行信証（化身土・本）三四三―七七

おおよそ浄土の一切諸行において、綽和尚（道綽）は「万行」（安樂集）と云い、導和尚（善導）は「雑行」（散善義）と称す、感禪師（懷感）は「諸行」（群疑論）と云えり、信和尚（★源信・★往生要集）は感師に依れり、空聖人（源空・選択集）は導和尚に依りたまうなり。

注　●感禪師（懷感（エカン））Ⅱ（七世紀頃）唐代の僧。長安千福寺に住した。感禪師とも呼ぶ。初め唯識を学び、のち善導大師に師事して浄土教の要義を学び、念仏三昧を証得したという。著書に『釈浄土群疑論』七卷（懷暉（エウン）補筆）がある。法然上人は「類聚浄土五祖伝」等で、浄土五祖の一人とする。

教行信証（化身土・末）三九八―一〇三

（★往生要集）★源信、『止観』に依って云わく、魔は煩惱に依って菩提を妨ぐるなり。鬼は悪病を起こす、命根を奪う。已上

尊号銘文　五一四―一四

「易往而無人」というのは、易往はゆきやすしとなり。本願力に乗ずれば、本願の実報土にうま  
るること、うたがいなければゆきやすきなり。無人というは、ひとなしという。人なしという  
は、真実信心の人は、ありがたきゆえに、実報土にうまるる人まれなりとなり。しかれば★源  
信和尚は、「報土にうまるる人はおおからず。化土にうまるる人はすくなからず。」（★往生要  
集意）とのたまえり。

註 ●報土Ⅱしんじつほうど「真実報土」Ⅱ阿弥陀仏の浄土。阿弥陀仏は因位の誓願と修行に  
報われて仏と成られた報身土であるから、その浄土は報土である。これに真実報土と方便化土  
の別があり、他力の信心を得た者のみが往生する報土を真実報土という。

尊号銘文 五二五―L二

首楞嚴院★源信和尚の銘文 「我亦在彼攝取之中 煩惱障眼雖不能見 大悲無倦常照我身」(★  
往生要集) 文

親鸞聖人血脈文集 五九四―L一五

第十八の本願成就のゆえに、阿弥陀如来とならせたまいて、不可思議の利益きわまりましまさ  
ぬ御かたちを、天親菩薩は尽十方無碍光如来とあらわしたまえり。このゆえに、よきあしき人  
をきらわず、煩惱のこころをえらばずへだてずして、往生はかならずするなりとするべしとな  
り。しかれば、恵心院の和尚は『★往生要集』には、本願の念仏を信樂するありさまをあらわ

せるには、「行住座臥をえらばず、時処諸縁をきらわず」とおおせられたり。「真実の信心をえたる人は撰取のひかりにおさめとられまいらせたり」とたしかにあらわせり。

### 源信

教行信証（行）二〇七―一六

★源信、広く一代の教を開きて、ひとえに安養に帰して、一切を勧む。専雑の執心、浅深を判じて、報化二土、正しく弁立せり。極重の悪人は、ただ仏を称すべし。我また、かの撰取の中にあれども、煩惱、眼を障えて見たてまつらずといえども、大悲倦きことなく、常に我を照らしたまう、といえり。

教行信証（化身土・本）三三〇―一四

しかればそれ楞嚴の和尚（★源信）の解義を案ずるに、念仏証拠門の中に、第十八の願は「別願の中の別願」なりと顕開したまえり。『観経』の定散諸機は「極重悪人唯称弥陀」と勧励したまえるなり。濁世の道俗、善く自ら己が能を思量せよとなり。知るべし。

註 ●楞嚴の和尚Ⅱ比叡山横川の首楞嚴院に住した源信和尚のこと。 ●首楞嚴Ⅱ文末参照

教行信証（化身土・本）三四三―一〇

信和尚（★源信・往生要集）は感師に依れり、空聖人（源空・選択集）は導和尚に依りたまうなり。

教行信証（化身土・末）三九八―七三

（往生要集）★源信、『止観』に依って云わく、魔は煩惱に依って菩提を妨ぐるなり。鬼は悪病を起こす、命根を奪う。已上

浄土文類聚鈔 四一三―七八

★源信、広く一代の教を開く、ひとえに安養に帰して一切を勧む、諸経論に依って教行を撰びたまう。誠にこれ濁世の目足とす。得失を専雑に決判して、念仏の眞実門に回入せしむ。ただ浅深を執心に定めて、報化二土正しく弁立せり、と。

高僧和讃 四九七―B一

★源信和尚ののたまわく われこれ故仏とあらわれて 化縁すでにつきぬれば 本土にかえる  
としめしけり

高僧和讃 四九七―B二

本師★源信ねんごろに 一代仏教のそのなかに 念仏一門ひらきてぞ 濁世末代おしえける

高僧和讃 四九七―B三

靈山聴衆とおわしける ★源信僧都のおしえには 報化二土をおしえてぞ 専雑の得失さだめ

たる

高僧和讃 四九七―B四

本師★源信和尚は 懐感禪師の釈により 処胎経をひらきてぞ 懈慢界をばあらわせる

高僧和讃 四九八―B三

善導★源信すすむとも 本師源空ひろめずは 片州濁世のともがらは いかでか真宗をさとり  
まし

尊号銘文 五一四―L一六

しかれば★源信和尚は、「報土にうまるる人はおおからず。化土にうまるる人はすくなからず。」  
(往生要集意)とのたまえり。

尊号銘文 五二五―L二

首楞嚴院★源信和尚の銘文 「我亦在彼摄取之中 煩惱障眼雖不能見 大悲無倦常照我身」(★

往生要集) 文

正信偈大意 七五七―L一一

「★源信広開一代教 偏帰安養勸一切」というは、楞嚴の和尚はひろく釈迦一代の教をひらきて、もっぱら念仏をえらんで、一切衆生をして西方の往生をすすめしめたまうなり。

「専雑執心判浅深 報化二土正弁立」というは、雑行雑修の機をすてやらぬ執心あるひとは、



かならず化土懈慢国に生ずるなり、また専修正行になりきわまるかたの執心あるひとは、さだめて報土極楽国に生ずべしとなり。これすなわち、専雜二修の浅深を判じたまえるところなり。『讚』にいわく、「報の浄土の往生はおおからずとぞあらわせる 化土にうまるる衆生をばすくなからずとおしえたり」といえるところなり。

### 参照

首楞嚴經しゆりようごんげん 具には、シユリヨウゴンザンマイキョウ〈首楞嚴三昧經〉。ドムムセン曇無讖訳のダイハツネハンギョウ大般涅槃經（卷四）にも言及され、また大智度論にはしばしば引用される大乘仏教初期の經典。サンスクリット原典はわずかな断片以外に伝わってはず、またしばしば漢訳されたが現存するものは鳩摩羅什クマラジユウ訳の二巻のみである。

### 首楞嚴經（内容）

内容はまず上巻において、王舎城の耆闍崛山キジャクツセン（靈鷲山リョウジュセン）中に在します仏世尊タイゴウシユケンイに對告衆堅意菩薩が、いかなる三昧を行じたならすみやかに阿耨多羅三藐三菩提アノクタラサンミヤクサンボダイ（無上正等覺）を得て仏の諸々の功德クドクを現しながら、しかも畢竟して涅槃に入らずに永遠に衆生利益シユジョウリヤクの活動を繼續することのできるかを問ひ、仏がそれに対して、心を修治すること猶し虚空の如く、現在衆生の諸心を觀察し以下、大滅度に入りて而も永く滅せずに至る百の功德を包含する首楞嚴三昧を種々

の譬えをもって説く。さらに下巻においては、魔界行不汚という菩薩が自ら魔宮に行き、悪魔および魔衆中の七白天女などを教化して無上菩提心を発せしめ、仏が悪魔に授記するという因縁を通じて、未来世の非清浄の衆生にも大乘の慈悲が及ぶことを明かす。

源信げんしん

九四二（天慶五）〜一〇一七（寛仁一）平安中期の天台僧。大和（奈良県）の出身。幼くして比叡山に登り、後に座主となった良源に師事、十三歳で得度受戒した。その秀れた才学によって三十三歳のとき、法華会の広学リョウギ堅義にあずかり、名声を謳ウタわれたが、いつの時か、名利を嫌って横川ヨコカワに隠棲した。隠棲後、頼まれて仏教論理学インシヨウ（因明）に関する著述をものし、また四十四歳の年、往生極樂の教キョウ行ギョウこそ末代の目足であつて、頑魯の者のための道であると断じて往生要集三巻を完成し、日本浄土教史に一大金字塔をうちたてた。

源信げんしん（念仏結社・著作）

やがてこれを指南とした念仏結社が生まれ、源信はこの結社のために毎月十五日を念仏の日と定めるなど十二条の細則（起請十二箇条）を作っているが、このような規式は、源信の勧めで造られた靈山リョウサン院イン釈迦堂についてもみられる。六十二歳のときには弟子寂昭（照）の入宋に託して四明知礼に天台宗疑問二十七条を書き、六十四歳の年には大乘対俱舍抄、翌年には一乗要決を著した。とくに一乗要決は長く争われて来た法相宗との対立に終止符を打ち、天台教学の

宣揚に光彩を放つ榮を担った。源信はその住した恵心院によつて世に恵心僧都エシソウズと敬称されるが、  
実際は権少僧都を任じられた六十三歳の翌年、これを辞退している。

## 〈法話〉

先程、ご挨拶の中で仰っていただきましたように、仏恩ということ、仏の御恩とはどういうことかと申しますと、本願の御恩と教えの御恩、もう少し詳しく申しますと、阿弥陀如来の御恩というのは、本願を立てられて、我々すべてを平等に救われようとされたその願の御恩でございます。教恩といえますのは、その法蔵菩薩の本願を受け止められた釈尊が、そのことを中心にして大無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経、なかんずく大無量寿経をお説き下さった。これが真実の教であると親鸞聖人が仰っておられる訳であります。

それともう一つは、親鸞聖人の報恩講がどういうことで起こり、どういう具合に伝わってきたかということでございます。これは皆さんすでにご承知のとおり、親鸞聖人が関東から京都にお帰りになった後、九十歳で亡くなるわけでありましたが、亡くなってからその御命日である二十八日に、門弟が相寄り集いまして二十八日の念仏という聞法会を続けてきたというのが関東のことでもあります。

もう一つは、京都で親鸞聖人のお子様である、末娘様であられる覚信尼公が、自分の土地を親鸞聖人の御廟の用地として全部提出されまして、そこに親鸞聖人の姿を安置した小さなお堂が出来上がるのが、文永九年のことだと『口伝鈔』の中に出ております。これは親鸞聖人がお亡くな

りになりましたから、十年後のことでもあります。そこで毎年、親鸞の御命日に門弟が集まりました、親鸞聖人の残されたお言葉をずっと味あわせていただいて、自分の信心を決定させていた。つまり、自分の信心が決まるということが、親鸞聖人の御恩報謝の根本だということをもつも思いながら、この毎年二十八日にお勤まりがなされてきた。

こういう二つの流れがあります。もう一度申しますと、関東での二十八日の念仏、一つは京都で文永九年に御影堂の原型が出来上がりまして、覚信尼公を中心にして、親鸞聖人のお言葉をいただいで自分の信心をはっきりとしようという集いが、ずっと続けて行われてきた。こういうことはもう既にご承知のとおりであります。

今日、皆様方にご覧いただいております資料、「『御俗姓』 口語訳―報恩講をおつとめする意義―」というのは、これは蓮如聖人が書かれた『御文』でありまして、先程のお勤めの後に、拝読されたわけであります。この『御文』は、『聖典』で申しますと八五一頁にありまして、『御俗姓』という名が付いております。

それはなぜかと云いますと、初めに、「それ祖師聖人の俗姓をいえば」という言葉がございますので、他の『御文』と区別しまして、『御俗姓御文』と申し上げているわけであります。親鸞聖人の世俗の姓について述べられているわけではないのでありまして、最初の言葉をもって、『御俗姓御文』と云っておるわけでした、内容は、報恩講をお勤めする意義ということをはっきりし

なくてはならないという気持ちで、大阪府、昔の河内の国の出口という所で、急に思い立たれて書かれたのがこの『御俗姓』だそうであります。

それは、親鸞聖人が亡くなられてから、二〇〇年後のことでありまして、この『御俗姓』の中に、「二百余歳」と書いてありますが、これは文章のあやであります。年表を見ますと、親鸞聖人が亡くなられてから二〇〇年経った今日ですね、報恩講は毎年勤まっておるけれども、それがなぜ報恩講をお勤めするのかという意義がはっきりしないまま、年中行事として今まで続いてきた傾向があります。だから、これは単なる年中行事ではございません、これは真宗門徒として大事な意味があるのが報恩講でありますということを、この長い『御俗姓』をお書きになってお示しになったわけです。

ところが、この『御俗姓』は五〇〇年前の言葉でございます。古語ですのでわかりにくいというところで、私が二〇〇年程前に、真宗会館に勤めさせていただいている時に、ご要望がありまして、この『御俗姓』を分かり易い現代語になおしてくれないかという、そういうご要望に従いまして作りましたのが、この皆様方のお手元にコピーが届いております、「御俗姓口語訳」(資料一)であります。

しかしながら、この口語訳は国語的な完訳ではございません。私がこの『御俗姓』の意味を受け取った、その私の受け取り方で口語訳をしているわけであります。多少間違っていたり、足り

ないことがあると思います。そういう意味でございますので、ひとつそこをご了解の上、ご覧いただきたいと思います。まず読んでみます。皆様もご一緒に読んでいただきたいと思います。

### 御俗姓口語訳

― 報恩講をおつとめする意義 ―

宗祖親鸞聖人のご先祖は藤原氏であり、聖人は後長岡の大臣と云われた内麿公の末孫、日野有範の子であります。

また聖人は、我々末代の凡夫に対し本願寺念仏を教えるため此の世に現れた阿弥陀如来の化身とか、中国の浄土教の祖である曇鸞大師の生まれ変わりとか云われています。

このような（世に稀な素晴らしい）方でありますので早くも九才の時、慈円僧正（慈鎮和尚）の弟子として得度式を受けて「範宴」という法名を付与され、天台宗の僧侶となりました。それから比叡山の横川の源信僧都の教えの伝統の中で修行し、天台の学問を極められました。

ところが二十九才のとき、元祖法然上人の本願念仏の教えに会い、上人の優れた弟子となって真の大乗仏教としての浄土真宗を身にいただかれ、念仏一つで宗教的自覚者となる道を明らかに示されました。そして私達のような家庭生活・職業生活の中で苦悩している愚かな者に、真実の

如来の光明の世界（真実方土）に生まれるようすすめられました。

云うまでもなくこの十一月二十八日は、親鸞聖人の御命日であり、昔から真宗念仏者は皆忘れずに毎年御正忌報恩講をおつとめし続けて来ております。

だから当流本願寺教団に真宗門徒として加入し、他力の信心をえようとしていながら、聖人のご恩を報謝しようとする志のない者は、まったく枯れ木や岩石のようなもので、聖人と心の響き合いのない名ばかりの門徒であります。

ここでちよつと申しますと、枯れ木や岩石というのは、どういうことでここに引かれておるか  
と云いますと、「木石にひとしからんものなり」ということが、原文にあるわけでありまして、それは、木と石と書いてありますけれども、その意味はどういうことかと云いますと、枯れ木と岩石ということで、枯れ木は雨が降っても芽を出さない。岩石は雨の水が滲み込まないで、ただ上を流れてしまうだけだと、そういう喩であります。それで御恩を知らないものはどういうことかと云えば、喩えて云うならば、枯れ木や岩石のようなもので、聖人と心の響き合いのない名ばかりの門徒であるということです。その次にまいります。

聖人の御恩はなにもものにも比較できない極めて高く深い大きなおめぐみであり、この大恩を報



謝する心を失ってしまったては、真宗門徒として目覚めて生きる意味が有りません。

このような深いわけがあつて、毎年の旧例として七日間、特別の莊嚴を整えて儀式を行い、報謝のために最高のお勤めをいたします。この七日間の報恩講には、全国各地から必ず門徒が参集してこの御仏事を厳肅におつとめするならわしが今日までずっと続いていきます。

しかし、安心あんじんがまだはつきりしていない者には、御恩報謝の心が徹底する道理が有りません。

ここが大事なことです。安心あんじんというのは、我々が普通申しております、安心あんしんという字と同じ字を書いておりますけれども、仏法の読み方では、安心あんじんと濁つて読みます。安心あんしんというのは、私たちが仏法の御法のお蔭で、もうどんな自分にとつて都合の悪いことが起こりましても、それによつて絶望しないような依り処をはつきりさせていただく、そういうことです。具体的に云えばそういうことです。又、自分にとつて都合の善いことが次々起こつてきて、飛び上るほど嬉しいような状態の時であっても、有頂天になつて自覚を失うことがない。そういう両面ですね。順境においても、逆境においても、落ち着いた依り処をはつきりと念仏の御法の上にいただいで生きていけるということでございます。

先程、住職様のお話の中に、年齢の問題が出てまいりました。私は、大正十二年（一九二三）の生まれでございますので、来年の三月十二日で満九〇歳になります。生老病死ということは、

仏教の四苦という四つの苦しみということがございますが、これは外から見た時は、さほど昔と変わらない様な状態に見えましても、歳を取りますとだんだん肉体的機能も精神的機能も衰えてくるわけであります。もっとこれを具体的に申しますと、若い時と違ってなんか自分の衰えた身体を引き摺って歩いている。引き摺って歩いているというのは、云い方がまずいかもしれませんが、そういうことであります。それは歳を取らないとわからないのです。若い人に老苦ということをごだけ説明しても、体験がなければそんなものかなあというようなことなのです。自分が歳を取ってみますと、口に出しては云えない様々な難儀が出てくるわけです。例えば、立ち上がる時にさっと立ち上がれないのです。こう持って立ち上がらないと。入浴する時などもそうです。何かに手を添えて風呂に入らなくてはならない、そういう状態になってくるのです。それがどんどん歳を取ってくると、他の人に介護していただかないと生きていけないという状態になりがちなのです。皆がそうなるとは限りませんが、そうなりがちなのです。そういう問題も乗り越えていける。

つまり、明るい心で前向きに生きられるような精神的な自覚を安心あんじんと云うのでしよう。私はそう思います。曾我先生が、「歩くということは、一歩前に出すことだ。」と云われた。なぜそんな分かりきったことを云われるのかと私は思いましたが、やはり後ろ向きに生きるのではないのだ。「もうだめだ、これまでだ」というような心ではなく、「これからだ」という心を見失わな

いように、私たちは明るい精神で生かしていただけるその元になる落ち着きどころを安心あんじんと申します。これは大事です。

安心あんじんに対し、帰命あんにんと云います。帰命あんにんとは、聖道門の仏教では特別の精神統一をするのが帰命あんにんなのですけれど、浄土真宗におきましては、南無阿彌陀仏を忘れない暮らしをするということなのです。嬉しい時でも、悲しい時でも、それから、自分の身体の調子が良い時でも、悪い時でも、南無阿彌陀仏を忘れない生活をする。そうすると、私の前にいつも本願を起こされた阿彌陀如来がいらつしゃるといことがわかるのです。一言で云えば、言葉になった仏が私を忘れるなど名告つておられる。私を念じて浄土を願つて生きなさい、前向きに生きなさいということを、南無阿彌陀仏という言葉で私にお示しになっておられる。それを感じることが出来るか出来ないかということとは、こちらの問題でございませす。ですから、安心あんじんがなければ、帰命あんにんということがはつきりしないわけです。

安心あんじんがはつきりすると、南無阿彌陀仏というこの行ということですね。これは聖道門の人の云ういわゆる座禅とか、その他精神統一の行ではなくて、私たちが家庭生活、職業生活をしながら純粋な仏の御心に触れて生きるということです。平たく云えばそういうことです。家庭生活、職業生活は、なんとか自分の都合のいい楽しい生き方をしたいものだという欲望が前に立っておるわけであります。

もう一つ申しますと、善悪というものをたてて生きなくてはならないということです。そうしますと、何か事が起こりますと悪いのは相手で、善いのは自分だというような、そういう心で生きるような私です。愚かな私です。その愚かな私が、南無阿弥陀仏という六字のお言葉でもって、自分の迷いをきちつと知らせていただいでいくという、そういう生活ができるというのが、これが浄土真宗の一番肝心なところですね。行ということ。ですから、浄土の行、聖道の行という言葉が出てきますが、聖道の行というのは、職業生活も止め、家庭生活も止めて、そして教団に入って、一生涯僧侶として生活をするというのが聖道の行であります。ところが、法然上人と親鸞聖人がお二人で明らかにしてくださった、共同で明らかにしてくださった浄土の教えによる行というのは、私たちが家庭生活をしていても、職業生活をしていても、どういう状態に置かれておりましたも、忘れないで南無阿弥陀仏と申す。そうすると、自分の前にあなたを見捨てずに救うという大きな用はたらきを持った如来が名告っておられる。私は南無阿弥陀仏だと名告っておられるとわかる。そうすると、その人はそのことがはつきりすると明るくなるのです。暗い心が起こっても、その暗い心がひるがえるということです。

それで今日、私はどういふことをお話し上げようかといろいろ考えてきたのです。もう二〇年も報恩講にお参りさせていただいてですね、櫛は毎年同じことばかり云っているなあと、それを云われても別に構いませんが、何か一つ新鮮なことを申し上げなければならぬと思つて、今

年は、回向ということをお話ししようと思います。

回向<sup>えこう</sup>。回轉の回に向かうという字です。回向ということは、一般に真宗ではありませんで、一般に仏教徒がお寺に行つて、「今日は、親の命日であります。回向をお願いします。」と云つて、お経をあげてもらふことを、回向と云うように普通云つてゐるわけです。真宗の回向とは、そういう意味ではありません。それは、回向というのは、仏が私に用<sup>はたら</sup>きかけて、私の信心を決めてくださるその用<sup>はたら</sup>きが、回向なのです。つまり、仏の方から私の方に向いてくるのです。私の方が仏の方に向いて、どうか私を見てくださいというのではありません。仏の方からあなたを決して見捨てないよという大きな用<sup>はたら</sup>きで、どうか浄土を願つて前向きに生きなさいと、いつも積極的に用<sup>はたら</sup>きかけてくださる。

これは難しい言葉で云つたら、第十八願の中で、「我が国に生まれんと欲<sup>おも</sup>え」、欲生<sup>よくしよう</sup>我國<sup>がこく</sup>ということです。欲は、欲するの欲です。生というのは生まれる。我が国に生まれんと欲<sup>おも</sup>えと。それはもう一つ申しましたら、我が国に來たり生まれよ。これはどういうことかと云うと、この穢土の普通の人間生活の中での価値というような觀念に引つかからないで、浄土を願う生活をすれば、あなたの生活は一新しますと。こういうことは書いていないけれど、私が分かりやすくするために申しました。古い精神が続いていくというのではなく、いつも念仏によつて一新するという精神の生活ができるようになる用<sup>はたら</sup>きかけを私たちにしてください。それが、回向です。それを普通

の本を読むと、お与えという具合に易しく云ってある本が沢山あります。与えるというと、物を貰う、物を授けるといふふうな具合に考えるけれども、そういうことではないのです。回向といふのは、本願の大きな用はたらきかけが、私の信心を成就せざるを得ないようにしてくださる大きな用はたらきを、回向といいます。

それで、本願成就の文を聖道門の人の読んだ回向と、親鸞聖人が読まれた回向とでは読み方が違うのです。親鸞聖人の読みは、「至心に回向したまえり」と敬語が付けてあるのです。本願成就の文に。これは、如来が私わたしに用はたらきかけてくださる。回向してくださる。その回向が、南無阿彌陀仏。

それで、『和讃』の中に、

「南無阿彌陀仏の回向の 恩徳広大不思議にて 往相回向の利益には 還相回向に回入せり」

（『正像末和讃』〈第五〇首〉五〇四頁下段）

という『和讃』がございます。これは難しい言葉が使われておりますが、私が易しく申しましたら、南無阿彌陀仏が私わたしに用はたらきかけてくださることによって、私は常識ではできなかった浄土を願って生きるといふ、間違いない精神生活ができるようになりますということが、回向という

ことだと思えます。浄土を願わなければ、我々はこの世に執着するだけです。若い時は良かったなあと。

歳話をしますと、もっと元気にしてどんどん歩けたが、歳を取ったらだめだなあ、もうぼちぼちしか行けないなあとというような心が起こることがある。

それからもう一つは、字を忘れることです。私は黒板があると字を書いてお話をするのですが、黒板に向かって字を書くとは出てこないことがあるのです。字を書くつもりで恥をかく、ということがあります。この頃便利なものができております。電子辞典という。私はここに持っているのです。字を書いて恥をかく前に、この電子辞典を。こういうのに何十種類もの字引がこんな小さいものに入っている。便利なものが今出来ております。字を忘れたら引けば出てくるのですが、ある人が曰く、「あんたがそんなに便利なものを使うから字を忘れる。」と。こういう人がおりまして、そうかなあと思う。便利なものが出来れば出来るだけ、そこに自分の能力の欠如した分を機械に頼るといことになるわけです。そういう時代でございます。私はその前向きに生きるということが自分に忘れられている。歩き方が遅くなっても前向きに生きるという精神が、これは機械では得られないのであります。自分の安心あんじんがはつきりすることが大事なことでございます。そこで『御俗姓』にかえりまして、十一行目です。

しかし、安心あんじんがまだはつきりしない者には、御恩報謝の心が徹底する道理が有りません。未安みあん心の者は、この報恩講七日間に、

仏法の信心とはどういう信心なのか、

他力の信心とは、自己自身にとってどういう目覚めなのか、

本願念仏のはたらきでどのように自己自身が変革されるのか、

自分は果たして信心がえられているのか、

などをよく尋ね、よく聴聞して、法による目覚めが確実になることが何より大事であります。そして眞実信心が間違いなく定まったとき、はじめて宗祖親鸞聖人の御恩に報いることが出来るのであります。

これがなかなか容易でないのです。口語訳する、現代語訳することはある程度できても、実際にどうかということです。これはなかなか容易ではないのです。それで浄土眞宗は難信という。念仏申すことは易しいが、念仏によって私の安心が定まることが難しい。

「竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。」（『教行信証』一四九頁）というお言葉が、総序の文の中にございます。『聖典』をお持ちの方は『教行信証』の最初の言葉をご覧ください。私たちの頭で考えて、阿弥陀



如来の本願がこういうものだといって、はつきり自分で説明できるといふ、そういうものではないりません。私たちの頭を超えた、遙かに超えた大きなお用はたらきが本願であります。それを私は自分の言葉に直してみたら、絶対自由、絶対平等、絶対平和の世界を会得させていただくのです。普通、我々が何かにつけて不自由だと云って困っているわけです。

それから、人から差別される。一時、差別の問題が非常に大きく取り上げられた時代がございましたが、時代の如何にかかわらず、いけないことは差別です。ところが、差別を自分が受けているところもあるし、また知らず知らずの間に、人を差別するということが出てくるわけです。本当は絶対平等なのですけれど、そういうことを忘れてしまって、差別発言をする。

それから、もう一つは平和ということ。私の心が穏やかでないということ、それが一番問題です。平和というと、戦争をしないことを平和だというのが普通の常識なのですけれど、眞の救済というのは、私の心の平和が破れないということ。人からどれだけ非難されても、あるいは、悪口を云われて、それがいろんな所を回って聞こえてきても、人を恨むとか憎むとかいう心が反射的に起こった時に、ちゃんと南無阿弥陀仏が称えられる。そうしますと、私が恨むとか、憎むとかいう心は、私の煩惱だということをはつきりとわからせていただく。

それで、『御伝鈔』をご承知でしょう。覚如上人が、親鸞聖人の御一代のことを長い絵巻物を作って明らかにされたのが『御伝鈔』です。その中に、親鸞聖人が承元の法難でもって、聖道門

の大きな非難を受けて流罪になられる。法然上人は土佐の国に流罪されるはずだったのが、讃岐の国で捕えてもらわれたということがありますが、親鸞聖人はお若かったですから、文字どおり越後に行かなくてはならなかった。そういう状態の中で、親鸞聖人が仰られたことは、「これ猶師教の恩致なり。」という。これは法然上人の教えのお恵みの致すところである。最も都合の悪いことが自分に降りかかってきた時に、「師教の恩致なり」と受けと止められるという、そういう心ですね。私は、この『御伝鈔』の中で、あのお言葉を文章だけのことではなくて、本当に自分に都合が悪くなった時、逆境におかれた時も師教の恩致であると、自分の教えの恵みの致すことであるという受け止め方が、お前にできているかということ、私に問われていることだと思います。

それでは、『御伝鈔』を見てみましょう。『聖典』をお持ちの方、『本願寺聖人伝絵』という題がついております。『聖典』の七二五頁後ろから四行目、

「そもそもまた、大師聖人 源空 もし流刑に処せられたまわずは、われまた配所に赴かんや、もしわれ配所におもむかずは、何によりてか辺鄙の群類を化せん、これ猶師教の恩致なり。」

（『本願寺聖人伝絵上本（御伝鈔）』七二五頁—L一三）

という言葉があります。都にだけいては、都から遠い越後の国の田舎の人に、法然上人から教えられた浄土の教えを伝えることができなかつただろう。だから流罪を受けたということは、単に自分が罪人になって酷い目に遭うという、そういうことではないので、これは師匠法然上人の教えのお蔭でもって、自分がこの都から遠く離れたところに住んでいる人たちに、阿弥陀如来の本願の深いいわれをお伝えする力を与えていただいた。それは辺鄙の群類というと、何か人を差別したように聞こえますけれども、それは都から遠く離れた田舎の人に、本願の深い味わいをお伝えする機会を与えていただいたのだ、これは大変なお蔭でありますと、そういう具合に受け止めておられるのです。

私は、長い間、田舎暮らしをしておりまして、皆様方、埼玉県でも東京とほぼ同じでしょうね。ちよつと電車に乗れば、荒川一つ向こうは東京ですから、埼玉県といつてもこれは東京ですよ。ところが、鹿児島というところとちよつとこれは遠いです。今では飛行機が出来まして、ずいぶん長くへだたっています。鹿児島空港から羽田空港まで飛行機に乗っている時間は、一時間半足らずでまいります。そんなに遠い田舎だという気持ちは今ございませんけれど、そういう状態になります。戦後の一九四五、六年の頃は、それはそれは遠いところで、そうして鹿児島弁というのがあるのですよ。ちよつとここで私が鹿児島弁を話しても全然わからないでしょう。外国語くらいにしか感じられないでしょう。そういう所に私は縁があつて行きました。どうして私はこんな

田舎に来たのかなあ、という気持ちがありました。

そういう体験がございますので、この『御伝鈔』のこの言葉を見ますと、親鸞聖人という方が、どのように深いお心で現実の生活を受け止めておられたかということが、私はこの『御伝鈔』の言葉で受け止められると思います。それは、覚如上人は文章のお上手な方で、果たして親鸞聖人がこう云われたか、思っておられたか、それはわかりませんので、覚如上人の作文だと云う人もあります。私はそういうことも云えないとは思いませんけれども、この「師教の恩致」ということを非常に有り難く思います。

それで、先程から申しますように、願恩と教恩です。報恩講の恩はですね、如来の本願の御恩と、その本願の深い味わいを言葉でもって、教え示してくださった教えの恩。そういうことを私は改めて思ひまして、恩ということはいろいろに云われておりますよね。恩恵ということは恵みなのだ。天地の御恩徳とか、衆生の恩とか、国王の恩とか、三宝の恩とかいう言葉でもって、表されているお経もございますけれども、私は、真宗門徒にとっては、願恩と教恩ということの二つを忘れないように生きられるということが、私たちが逆境にいても明るく、前向きに生きられる力になっていただくのだということをお知らせしていただいております。

ちょっと休ませていただきます。

## 〈休憩〉

時間になりましたので、再開致します。先程は、回向ということをお話し申しております、それがちょっと横に跳んだ訳でございますが、回向というのは、回轉の回の字に、向かうと書いて、現代語で云ったら、一般的な意味は、回轉ということですが、こつちのものは向こうに行く、向こうのものはこつちに来ると。自轉車の輪で云いましたら、下にあったものが上に行き、上にあったものが下に来るといふことで、回轉するわけです。ほんの一般的な意味では、回轉ということですが、仏教語で云いますならば、回轉えてんしこう至向しこうです。ところが、聖道門仏教ではどういふことを回向といふかという、一生懸命に行をして、家庭を捨て、職業を捨てて、生産もしないし、子育てもしない。そういう生活に変えて、自分のやっている行為は、全て悟りに向かう行為なのだと云う。悟りに向かって、行為を集中していくことを、聖道門仏教では回向といふ。

時々テレビに福井県の永平寺の写眞が出てまいりますでしょう。若い時からお寺に入って、粗末な食事をして、座禅をして、問答をして、悟りに至る。その動き全体が、回向です。自力の回向です。

ところが、親鸞聖人は、自力の回向を尽くしても悟りが得られないということ、比叡山で感得されたのだと私は思います。

今日の資料、余計コピーしてもらいましたけれども、時間的に無理なのでちょっとだけ申しませす。「往生要集・源信（聖典抄出）」（資料四）というのがあります。源信僧都という方は、親鸞聖人が、比叡山に入られるずっと以前のお方です。（資料四）の九頁目、四行目を見ていただきます。

源信<sup>げんしん</sup>

九四二（天慶五）〜一〇一七（寛仁一）平安中期の天台僧。大和（奈良県）の出身。幼くして比叡山に登り、後に座主となった良源に師事、

良源は元三大師という大師号が付いているのです。

源信は十三歳で得度受戒した。その秀れた才学によって三十三歳のとき、法華会の広学<sup>リユウ</sup>堅<sup>ケン</sup>義<sup>ギ</sup>にあずかり、

真宗で云ったら、安居の先生という意味です。

名声を謳ウタわれたが、いつの時か、名利を嫌って横川ヨコガワに隠棲した。隠棲後、頼まれて仏教論理学インミョウ（因明）に関する著述をものし、また四十四歳の年、往生極樂の教キョウ行ギョウこそ末代の目足であつて、頑魯の者のための道であると断じて往生要集三巻を完成し、日本浄土教史に一大金字塔を打ちたてた。

業績は大体こういうお方であります。その資料、「往生要集・源信（聖典抄出）」（資料四）の一頁目の八行目に、

「極重の悪人、他の方便なし。ただ弥陀を称して極樂に生まるることを得」

（『教行信証』『行巻』一八八頁―一七）

という言葉がある。もう一つ、二頁目の七行目に、

「我またかの摂取の中にあれども、煩惱眼を障えて見たてまつるにあたわずといえども、大悲倦きことなくして常に我が身を照らしたまう、と。已上」

（『教行信証』『信巻』二二二頁―一六）

こういう「大悲倦きことなくして常に我が身を照らしたまう」という、この感覚ですね。これは、天台の学僧であられる源信僧都が、聖道門の僧侶でありながら、浄土教に入らなければたすからないのだ、ということを示してください。大事な言葉が二つあるということで、親鸞聖人は、『正信偈』の中に、この言葉を引いてあります。

極重悪人唯称仏 我亦在彼摄取中 煩惱障眼雖不見 大悲無倦常照我

(『教行信証』『行巻』二〇七頁―七八)

親鸞聖人は時代が違いますので、源信僧都とお会いすることはできないわけです。ずっと後に、比叡山に登られた方でありますわけですけれど、源信僧都の『往生要集』をずっとお読みになっていたに違いないと思われまして、『教行信証』の中に、源信僧都の言葉が引用されているわけです。

「大悲倦きことなくして常に我が身を照らしたまうなり」というこの感覚ですね。大悲悲といふのは、平たく云えば、お前のような悪人を救わなければおかないという、こういう大きな御心を大慈悲と云います。悪人とは、なにも刑法上の悪をしているとか、道徳的に悪いことばかりをしているというわけではありません。悪人というのは、仏の教えが長い間、大事に深く教えられて



きたけれども、長い間、その教えを聞かずに、教えに背を向けながら、仏法に反する言動ばかりしてきた自分だということです。極重悪人。その極重悪人をお見捨てにならない。大悲倦きことなくして常に我が身を照らしたまうなり。こういう言葉に、親鸞聖人は、非常に感銘されたのではないでしょうか。回向ということはそういうことです。こちらから向こうに行くのではなくて、向こうからこちらに来る。如来の回向です。

聖人は、『大無量寿経』『下巻』の最初の『至心回向』を、「回向をしたまえり」と読んでおられます。回向したまえり。如来が、私に用はたらきかけて、私の信心を発起させてくださるから常に私が、光明によって照らされ続け、照らされて攝取しやくとされている。長い間の障りが、障りにならない生活をさせていただけになるようになったという喜びですよね。それが、攝取不捨ということだと私は思います。

私は自分のことを申しまして恐縮ですが、三重県の寺に生まれたのですけれども、私の青年時代は戦争時代でありまして、軍事訓練と、勤労奉仕だけで学生時代が済んでしまつて、学生の途中で学校を追い出されて、追い出されたというのは、学徒出陣ということです。個人的に追い出されたわけではないです。学徒出陣で全部が兵隊になるという。昭和十八年十二月に、そういうことがございまして、それから二十年の一九四五年の九月二十五日に、私は軍隊から解放されたのです。その間、人殺しの訓練ばかりしていたのです。

戦争というのは、非常になにか美名を付けていろいろ云っているけれども、結局、軍隊の中に入ってみれば、人殺しの練習です。自分が殺されない前に、人を殺すという、そういうことなのです。そういう訓練ばかり受けて、私は軍隊から解放された時に、これからどう生きていいかわからなかった。それが、藤代ふじしろ聴磨としまろ師という、曾我先生そがの随行をされた先生のお勧めをいただいて、「お前は曾我先生のお話を聞かないと救われない。いい加減なことでは救われない。」と云われて、それから私は、曾我量深先生の講義を聞かせていただくようになり、また、本を読むようになったのですが、最初に私が目を覚まさせていただいたのは、『歎異抄』の第一条なのです。

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつところのおこるとき、すなわち撰取不捨の利益にあずけしめたまうなり

(『歎異抄』六二六頁―七五)

それから後は出てこなかったのですけれど、私は酷い終戦後の貧しい時代に、労働しながら学校の講義に出ていました。朝早く起きて、労働の現場に向かおうとして目が覚めた時に、『歎異抄』の第一条の前半が、下宿の天井に現われてくださったのを自分が感じたのです。それが私

の回心のきっかけです。『歎異抄』の中には、「回心ということ、ただひとたびあるべし。」（『歎異抄』六三七頁―七五）ということがあります。単なる反省ではないのだ、回心とは、ぐいと引っくり返るのだということ。今まで国の為とかいうようなことで、人生を手段化して生きていた、そういう私が、自分が教えによって、前向きに生きること自体が尊いのだということが、そこでわからせてもらったのです。弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信ずる。その時私は、往生とはどういうことだとかいうようなことを頭で考えるゆとりはなく、新しい生活が始まるという具合に受け止めたのです。誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏申した。南無阿弥陀仏と申すということが、私の救いの原動力なのです。ただ発音すればいいのではないのです。南無阿弥陀仏という言葉の道理として、私のような愚かなものが前向きに生きる力を授けていただく。それはもつと詳しく云ったら、南無と帰命するということ。帰命するとは、私の最後の依り処が、この仏であるということをはっきりと知らせていただく。私の最後の依り処が本願なのだというのを、はっきりと知らせていただく。そこで生き方が変わったわけです。それは、私になにも自分を主張するために云うのではないのであります。長い間、寺で御厄介になり、お育てにあずかっておりながら、お寺の御恩ということも知らず、お寺の御恩のもう一つ奥に、親鸞聖人、法然上人、七高僧の御恩ということを感じなければならぬはずのものを感ずることができずに、二十数年やってきた。その私が、不思

議なこと、曾我先生の教えによつて翻つた。これが私は、はっきりと自分の回心だと思ひます。それはなにも主張するわけではないのです。

これで私は人生が始まったのです。二十年の兵隊から解放されるまでの人生というのは、訳が分からないままに生きてきたのです。生きるということの意義が、はっきりしないままに、その時その時、楽しいことや、嬉しいことを求めて趣味生活をしたり、そんな生活をしたりしていたわけです。人生がはつきりしなかつたのが、藤代先生と曾我先生のお蔭で、そこに「誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐる」ということが、理屈抜きにして、新しい精神生活が始まるのだという了解ができたわけなのです。それは嬉しかったです。それまでの私は、自殺するか、発狂する寸前になっていた。それが生きられるようになって、先程も申しますように、この年まで生かしていただく。それが私は、一言で云えば、覚めて生きるということ。覚めてとは、覚の字です。目覚めて生きる。冷えるという字の、冷めてではありません。覚めて生きる、目覚めて生きる。そういう生き方が始まらなければ、親鸞聖人の御恩を感じることができないのだと、この『御俗姓』にでているのです。ずっと後から読ませていただいて、ああそうだったのかと思ひました。それでは、『御俗姓』の口語訳の方を見ていただきます。(資料一)二頁目、

十六行目)

自分は果たして信心がえられているのか、

などをよく尋ね、よく聴聞して、法による目覚めが確実になることが何より大事であります。そして眞実信心が間違ひなく定まったとき、はじめて宗祖親鸞聖人の御恩に報いることが出来るのであります。

悲しいことですが、私達は聖人がおなくなりになってから百年以上もあとに生まれたので、直接聖人にお目にかかつてみ教えを聞くことはできません。

『御俗姓』を書かれた時、親鸞聖人が亡くなられて、満二〇〇年経っていた時です。これは文章のあやで、百余歳を経たりを和訳すると、一〇〇年以上後に生まれたのでという具合に、現代語訳したわけです。

しかし残されたお言葉によって私達がたすかかってゆく道理としての教・行・信・証の意義を我が身の上にはつきりいただくことが出来ることは極めて尊く有り難いことであります。

『教行信証』というのは、親鸞聖人の立教開宗の根本聖典でありまして、親鸞聖人ご自身は、『顕浄土眞実文類』と云っておられるのですけれど、それを簡略化して、『教行信証』と申し上げ

げているわけでありませす。続いて八行目です。

しかしこのことを今日の宗門全体の問題として考えたとき、聖人が「教行信証」を著作して私達に示された浄土真宗と云う考えを実践しようと志す多くの人々の中で、眞実信心をえた人は極めて数少ないのであります。

つまり、親鸞聖人と同質の信心を得たと云う人は少ない。門徒といわれる人は、数は多いけれど、親鸞聖人が『教行信証』に顕されている念仏往生の道、他力回向の道を、はつきり自分一人がためといただいて、そこで前向きに生きている人は少ないと、蓮如上人は云われるわけでありませす。

いたずらに他人の批判を気にしながら、義理や名譽の為に報恩講に参詣して、いかにも報恩謝徳の意味を知っているかのようにふるまっても、念仏申すひとおも一念の中に、本願に相応した究極の目覚め（一念帰命の眞実の信心）を体得し得ない人々は、どんなに懇志をはこんでも、この報恩講をおつとめする本当の意味にかなう筈はありません。それはせつかく風呂にはいつても、垢をおとさないで出て来るようなものです。

「水に入りて垢おちず」という言葉で、入浴のことで喩えてあるわけですから。ちょっと原文を見ていただきます。こういう喩がでてくるわけでありまして、『聖典』の八五二頁、七行目です。

「誠に、水に入りて垢おちずといえるたぐいなるべきか。」  
(『御俗姓』八五二頁―七七)

せっかく風呂に入っても、ずっと入っただけで、体を洗わずに出てくるようなものだという喩です。

これによりて、此の一七か日報恩講中において、他力本願のことわりをねんごろにききひらきて、専修一向の念仏行者にならんにいたりては、まことに、今月聖人の御正日の素意に相叶うべし。  
(『御俗姓』八五二頁―七七)

専修ということは、お念仏以外のものは全部投げ捨てるということです。念仏一つだということ。しかも、念仏を自力の心で称えるという、その心も捨てるということです。如来の回向である南無阿弥陀仏をいただくという、そこに集中するということを、専修という。そこに集中できないものは、雑修といいます。

雑行雑修という言葉があります。それはどういふことかと云うと、私たち日本人に当たって考えてみますと、民俗信仰、民間信仰というものがあつたわけだ。民族信仰というものは、神道だ。民間信仰というものは、いろんな動物を祀つていふような信仰だ。

今日で云うならば、新興宗教もそこにはいふわけだ。そういうのに引かかつてしまふというわけだ。なぜ引かかると云う、つまり、現世利益げんぜりやくを重点にして説くからだ。こうすれば経済生活が良くなりますよ、神を信じれば病気が治りますよ、神を信じれば入学試験が合格になりますよというよふな、自分の今、目指していふものを得るための、神信仰なわけだ。そういうことを一言で、現世利益と云うわけだ。現世利益といふことは、なかなか切り取れない。自分の欲望だ。欲望は叶えられるよふにといふことで、神を信じ、仏を信じる、いわゆる現世利益信仰といふものから離れられないといふ性質が、我々にあるわけだ。

そういう私たちが聴聞することによつて、他力の信心といふものは、そういう現世利益を追求するのではなくして、私たちの生活全体が変わるといふか、浄土を願う光明の世界を生きる。そういう精神生活をさせていただくといふところに、浄土真宗の深い味わいがあるのだけれど、それがなかなか難しいです。お念珠を持つてお内仏をいつも拝んでいても、やはり、そこに現世利益の心があると、いろいろなところに行つて、神様に祈禱したりする。

それからまたこの頃、放送を聞いておられますと、NHKだけでなく、民間放送もですけど、



宗教といったら祈りだと。祈りとは、自分の都合のいいようにしてくださいと祈るのだと、そういう具合にしか云わないのです。

ところが、浄土真宗の他力回向というのは、言葉を改めて申しましたら、万人に対する如来の祈りであると云ってよい。如来の深い祈り。すべての人が目覚めて生きて、この苦難を乗り越えて生きられるような力を授けたい。絶対自由、絶対平等、絶対平和の世界を生きるような人間にならせたいという深い祈りが、私たちに用はたらきかけてくださっているのが、回向だと了解させてくださいとあります。

そのことがわかってくると、親鸞聖人が大変なご苦勞をなさって、『教行信証』をお書きくださったという深い御恩を感じざるを得ないようになってくるわけであります。

また一般には、『教行信証』は言葉が難しく、長い聖教でありますから、今普及しているのは、『歎異抄』でしょう。私は、曾我先生からお聞きしたのですが、『歎異抄』の第一条は、『教行信証』に充てれば、『教巻』です。第二条は『行巻』、第三条は『信巻』、第四条は『証巻』だと、曾我先生が云われたことがあります。ちよつとだけ云われ、本にはあまり書いていないです。『教行信証』を深く読み込むことのできる人は、読まれるのが一番結構なわけですけど、それが出来ないならば、『歎異抄』の短いお言葉を、自分の救いの道として深く聞き開いていくことは大事なことでしよう。

私が最後に申し上げたいことは、『歎異抄』の第一条です。

本願を信ぜんには、他の善も要にあらざ、念仏にまさるべき善なきゆえに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえにと云々  
(『歎異抄』六一六頁―七八)

あのお言葉は何と云いますか、善悪の分別を超える世界をあらわしてくださっている。私たちは、何かにつけて善悪を立てて、善いのは自分で、人が悪いのだというように考えているような、そういう生活から脱皮することができ。それは第一条の、「本願を信ぜんには、他の善も要にあらざ、念仏にまさるべき善なきゆえに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえにと云々」というお言葉がたすかった証拠なのです。

難しい言葉で云ったら、正定聚の心境なのだ。仏に成る人の心境なのだ、曾我先生から聞かせていただいて、『教行信証』の中には、そういうことは書いていないのです。書いていないのですが、『歎異抄』の第一条の最後に、「本願を信ぜんには、他の善も要にあらざ、念仏にまさるべき善なきゆえに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆえにと云々」という言葉があって、そこに大事な現に救済されつつある念仏者の心境というものが、こういう言葉でもってあらわされてあるのだと、私は了解させて頂いております。

今日は、『御俗姓』を中心に、回向ということをお話し申し上げるつもりで来ましたが、なかなか十分に申し上げることが出来なかったのですが、その最後に、『御俗姓』口語訳の三頁目の十六行目、

このようなわけで、この度七日間の報恩講中に、本願他力の意義を十分聞き開いて、ただ念仏一つで真の目覚めが得られるという道理に身を挙げて納得出来たときに、初めてこの聖人の御正忌の本来の意義にかなうこととなります。

この本来の、報恩の意義にかなう御正忌がとめられたとき、御正忌が単なる聖人の御命日の法事にとどまらないで、本当の意味の報恩謝徳の御仏事となるのであります。

あなかしこ あなかしこ

(この口語訳は櫛暁が作成したもので、国語学的完訳ではありません)

こういう具合に、私は口語訳を結んだわけでございます。それは原文で申しますと、

今月聖人の御正日の素意に相叶うべし。これしかしながら、真実真実、報恩謝徳の御仏事となりぬべきものなり。あなかしこ、あなかしこ。

(『御俗姓』八五二頁―L九)

この最後のところを、こういう具合に了解したわけで、先程も申しますように、これは国語学的な翻訳ではございませんで、『御俗姓』をどのように私がいただいたかということ、口語訳させていただいたものでありますので、そのおつもりでお読みいただきたいと思っっている次第でございます。

それでは、これで私のお話は終わりにさせていただきます。皆様方のご意見なり、ご質問なりを引き続いて受けていきたいと思っております。

## 〈座談〉

(司会) 大変心に響く内容で、じっくり聞かせていただきました。有り難うございました。ここで、ご質問を受けたいと思いますが、時間もおしせまっておりますので、お一人かお二人、どうしても先生にお聞きしておきたいという方がいらっしゃいましたら、手を挙げてください。

(任職) 遠慮しないでください。質問した人にいただきがあるのです。質問が出ないというのは、どう質問していいのかわからないというのが、大変問題です。大体多いのです。仏法はこういうことを聞いたら恥ずかしいとか、笑われるとかはありません。どんな簡単なものでも、実は大変に難しいという、答えられないものにいくのですから、こんなことを質問したら笑われるとか、こんな質問ということはありません。自分において、生死を超えるという問題ですから、自分の身に充ててですね、先生ももう長くないのですから、今聞かなければ来年がある、明日があるということではないのですから、この一瞬を抜かして、たすかるか、たすからないか、一つ真剣にお訊ねください。余計なことを申しました。

(司会) いかがでしょうか。私も、先生の話聞いていて、あれ、読み返さなくてはいけない

なというのが、二、三ありましたけれど、もう少し勉強してから、ご質問させていただきます。

(住職) 真宗は勉強ではない。

(司会) いかがでしょう。

(淡海) 先生、有り難うございました。回向ということで、お話をいただいたのですけれど、如来の回向が感じられるということは本当に難しい。それはなぜかというところ、私が本当に信じられているはずなのですが、それを信じられているということを感じるということ、長いこと難しかったなあと思っております。どうしても私、私、というところが、今のお話ではありませんが出てくるものですから、どこかで言い訳をしているわけです。如来の回向を感じるというのか、如来に信じられているということが、有り難いとは思いますが、結局それと同時に、そこまで私を信じていてくださる如来に対して、私は信じられるに値するような自分ではないということを見せていただくのですね。それは本当に申し訳ないなあと思うし、それがなければ、本当にこの御教えがわからないのだということもわかるのですけれど、唯々申し訳ない自分、ここにおいてこんな私を見捨てないでくださっているところに、私はその有り難さを感じております。

(先生) 機の深信ですね。たすかるはずのないものをたすけようというのは、無縁の大悲です。

無縁とは、縁が無いという字で書いておりますが、縁なき衆生は度し難しというような、普通の意味とは違います。救われる縁のないものを救おうという大慈悲が、如来の大慈悲である。それが短い南無阿弥陀仏という言葉となつて、私たちにいつも用はたらきかけてくださっている。云い方を変えれば、大慈悲の回向ですね。

(淡海)

本当にそう思います。曾我量深先生のお話がいつも出てまいります。一つお聞きしたいと思っておりますことは、先生にとりまして、曾我先生の名言と云われる色々な言葉がございますが、その中でどの言葉が一番、先生にお響きになつていらつしやるのか、一度伺いたいなあと思つて、今日はちょっと伺いたいと思います。

(先生)

「往生は心にあり、成仏は身にあり。」ということですね。往生ということは、死んでから先のことだという具合に、我々は普通考えております。ところがそうではなくして、往生ということは、今、自分が教えを聞き開いた時に、初めてそこに新しい精神生活が始まる。それが、往生は心にあるということですね。

ところが、成仏というのは、この身体のまま成仏というわけにはいけません。これは、真言宗の云うような、即身成仏ということではできないというわけです。弘法大師の独自の心境で、即身成仏ということをやられたでしょうが、私たち浄土真宗は、そういう身のままに仏になると、釈尊と同じになるといふわけにはいけません。だから、生きて

いる間は、やはり煩惱の身であると。この身が終わろうとする時に成仏する。そういう身にさせていただくということ云々を云ってくださったわけです。往生は心であり、成仏は身であり。こういうことだと思えます。そういうことを、今まではつきり云われた方はいらつしやらなかったで、私はそのことによつて、いよいよ真宗の教えの大事なところ気が付かせていただいたように思っております。以上です。

(淡海) 有り難うございます。私ももう一度、そのお言葉をいただきまして考えさせていただきます。本当に有り難うございました。

(司会) どうぞ。

(岡田) 先生、どうも有り難うございました。私は、亡くなられた方が、亡くなるという命が終わるといふその時に用はたらき、私に語りかけられたことが、私がどうやってこれから先、生きていったらいいかということを決めてくださいました。

煩惱まみれで、この生死を流転していた私でしたが、櫛先生のお話を聞いている間に、この親鸞聖人の御教えの深さというものを感じさせていただきました。法の深信、絶対無限の信智を知らせてもらいました。機の深信の相対的に、有限のこの私を知るといふことを信智させていただきました。

(先生) 機の深信と法の深信は、一対のものでありまして、機の深信を抜きにして、法の深信



はありません。又、法の深信を抜きにして、機の深信はありません。それはどちらが先かというところ、そこに機の自覚が大事なことは事実です。機の深信が先にあります。

「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫」（『教行信証』『信卷』二一五頁—L一五）ということとは、救われるはずのない人間だということですが、もう救われるはずのない人間が、いま救われている。障りばかりで、もう一切の障りばかりで、私の未来を暗くしてしまうような私が、その障りから解放されると云いますか、無碍ということとは、そういうことなのではないでしょうか。

「念仏は無碍の一道なり。」（『歎異抄』六二九頁—L四）ということとは、長い間、自分が罪を作ってきたその障りから解放される、それが南無阿弥陀仏のお蔭である。回向ということとは、平たく云えば、お蔭をいただいて、目が覚めるということでしょう。

日本語で、英語に訳せない言葉がいくつかあります。深い意味でお蔭様ということは、常に照らされているということがあって、初めてお蔭様ということですが、そのことに気が付くことです。

「大悲無倦常照我身」ということは、源信僧都が云われたことは、『正信偈』の中に出てまいります。「煩惱、眼を障えて見たてまつらずといえども、大悲倦きことなく、常に我を照したまう。」（『教行信証』『行卷』二〇七頁—L一〇）

あれは常照我身ですから、我が身を照らす。身というのが、機の深信の身です。その身の自覚がなくて、自分は何でも勉強すればわかり、何でも自分の論理で始末が着くと思っっている間は、なかなか本願を信ずるということとはできないのです。そのことに気が付くのが、容易ではないのでしょうか。いくら教義を勉強しても、一つその根本のものが解けないと、その教義は単なる知識になってしまう。そういうことだと思います。

(岡田) 機の深信を、先生のお話を聞かせていただかないと、本当に全然わからないと思えますね。先生が仰ってくださいましたが、機の深信ということをはわからせていただいて、本当に南無阿弥陀仏に、如来様にたすけていただいているのだと感じさせてくださいありがとうございます。

(先生) 如来を念ずるが故に、自分を如来が念じてくださっているという事実がわかると善導大師が云われます。親縁、近縁、増上縁という、三縁積というのがあります。念仏申すことよって、初めて自分と仏の関係が極めて近い関係である。私が如来を念ずるということは、如来が私を念じ続けているということである、という具合に気が付くということです。そのことが大事なことだと思います。以上です。

(司会) どうもありがとうございました。

(住職) 川澄さん、読もうとして読んでからでなく、一つでも引っかけたことをお聞きする

といいよ。司会として、一切衆生の代表として。勉強してからでは間に合わないよ。

(司会)

引っかかったところというかですね、年毎に、阿弥陀如来様が私の後ろでたすけてくださっている。善いことも、悪いこともあるけれど、悪いのでも、もっと悪くなるのをたすけてくれて、これだけで片付けてくれたと思っっているのですけれど。ただそれだけを思うのではなく、それをたすけにして、日々の行動をどんだんに進めていく心掛けが必要かなあと思っっています。そんな考えでよろしいでしょうか。

(先生)

「長生不死の神方」ということが、『信巻』にあります(『聖典』二二二頁―七四)、私の身体は寿命が来れば、命亡くなるのは当然であるけれども、本願のいわれを聞いたものの御信心は、永遠であるということです。それが、長生不死の神方ということです。単なる長生きではありません。私の身体は一〇〇年内外のものですが、その間に、信心を得るということにおいて、自分の身体が減び、息が終わっても、ちゃんと信心は生きて南無阿弥陀仏となる。成仏することがわかれば、そこに死を恐れる必要がなくなる世界でしょうね。

清沢先生が亡くなる前に、世話をしていた原子はらこ広宣こうせん氏が、「何か云い残されることがございませんか。」と云ったら、「いや、何も云うことはありません。」と云われて、笑みを浮かべて亡くなった。

それから、鈴木大拙先生、禅宗の人だけでも、世話をした女の人と同じようなことを鈴木先生にお訊ねしたら、「Nothing thank you.」と云われたと聞いております。何か、自分の一生のことを、これもできなかつた、あれもできなかつた、残念だ、あれが憎い、これが憎いということばかり云って、いかなくってはならんものですね、「Nothing thank you.」と云える、そういう世界を会得することが出来るということを表してくださるのでしょう。

(司会) わかりました。

(住職) 余計なことを私が。念仏したら、これ以上悪くならないということが問題だと思うけれども。「Nothing thank you.」とはどんなことが起きても…

(司会) 私は今、七〇歳ですけど、住職と同じ。私は、九九歳まで生きるつもりでいますから。

(住職) 私は、明日はないと思っていますけれど、いや、今晚もないと思っていますけれど。

(司会) ただ、血圧が高いので、いつぱっくり逝っても、悔いのないように日々、生活していくつもりでございます。

(住職) 私は、一病息災ではないよ。十に余るくらい持っているけれど、明日はお目にかかれませんかもしれない。

(司会) お互い様でございます。ご住職と掛け合いが始まると、何時終わるかわからないので、それはまたお酒の席で、楽しく語り合いましょう。先生、本当に有り難うございました。

(先生) これで、終わらせていただきます。

## あとがき

本書は平成二四年十月二十八日、第二十二回報恩講における櫛暁先生のご法話の記録です。

今年も報恩講を迎えることができるのだと切に痛感しております。本年の五月櫛暁先生は胆石による痛みの為、胆嚢摘出手術をされました。毎月の会座を三回休会され、寺族や同朋の皆さんと共に先生の無事を念じ、ご出講を待ち望んでおりました。九月の会座には復帰され、先生のお元気なお顔を拝見し安堵したことです。

本書の中で、先生は、「安心（あんじん）」というのは、我々が普通申しております、安心（あんしん）という字と同じ字を書いておりますけれども、仏法の読み方では、安心（あんじん）と濁って読みます。安心（あんじん）というのは、私たちが仏法の御法のお蔭で、もうどんな自分にとって都合の悪いことが起こりましても、それによって絶望しないような依り処をはっきりさせていただく、そういうことです。具体的に云えばそういうことです。又、自分にとって都合の善いことが次々起こってきて、飛び上るほど嬉しいような状態の時であっても、有頂天になって自覚を失うことがない。そういう両面ですね。順境においても、逆境においても、落ち着いた依り処をはっきりと念仏の御法の上にいただいで生きていけるといふことでございます。」とお話下さっています。

先生がご出講されてご法話をされる姿を拝見し、具体的に身を通した「安心」（あんじん）の世界を発しておられると感じました。益々のご教導を切にお願い申し上げます。

先生には毎月当寺の会座でのご教化、並びに報恩講のご出講に深謝致します。また、ご闘病中にも関わらず、原稿に目を通して頂き校正賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

ご法話のテープを原稿に起こして下さいました、護持会役員の淡海雅子様、校正を手伝ってくれた伊東良英氏に感謝申し上げます。合掌

平成二五年十月二十七日

第二十三回報恩講にあたり

光照寺 副住職 池田孝三郎